

松沢智里編

群之存

下
△内閣文庫本▽

古典文庫

松
沢
智
里
編

群
々
存

下
△内閣文庫本▽

古
典
文
庫

古典文庫第三八九冊

不許覆刻

昭和五十四年二月二十日印刷発行

© 非売品

編者 松澤智里

発行者 吉田幸一

印刷者 帝都印刷製本株式会社

本の舞
<下>

発行者

[114]

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話〇三(九一〇)二七一七番
振替口座東京九一一四五九七番

目次

しつか物語	五
義経こしこえ	三
義経ほり川夜うち	四
常盤	六
頼朝いふき落	七
平家いわうか嶋	八
馬揃	九
牛若兵法未来記	九
那須の与市	一〇

頼朝はまいて九けのかい	二二
入鹿大臣たひし記	二六
百合若大臣一代記	二七
大しよくわん鎌足公入唐記	二五
きりかね曾我	一八
鎌田兵衛軍功記	二〇
文学上人一代記	二八
ふしみ落	二四
張良軍術記	二六
大日本記	二七

舞 の 本

△内閣文庫蔵本▽

下

しつか物語 全

去間梶原平藏景時鎌倉を立て都に着判官殿の思ひ人司士御前の御行衛を尋申せと行方なしつしゝに札を立其つうけを相待る九重のうちにもあはれ司士かのかれよかし縦くんこう有へくとたれやのものが参六原にて角登申さんと上下涙をもよほして哀とはぬ人そなき爰に司士か母の召使しあこやと申女有札を読んで見るに判官殿の思ひ人司士御前の御行衛を六原殿に参り申たらんするともからにしやうらうならはくわんをなしけならはいとのしやうくんこうこうによつてけしやうのそみたるへし景時判とかきとめたりあこやなゝめによるこふて此ふたをくわいちうし六原さしていそく梶原は司士御前を尋かね関東下向とて馬引立のらんとすあこやさうなく走寄人目をはかり此札を梶原かたもとへをとし入る梶原やかて心得此女房をさき馬に取てのせ六原を出る女手綱をひきむけて大和おう地にさしかゝり三の橋打渡りほうしやうしをもさし過て伏見と深草のさかいなるしやうとう

じへ乗入て爰そといふて馬をとむ 梶原馬の上よりも大音上てよはゝる判官殿の
思ひ人司士御前の此寺にまします由を承り関東の梶原か御迎に参りて候はやく
御出候へ鎌倉へくそくし申さんと大音上てよはゝる 司士も母ももろともに夢に
も人の知らしと社ふかく頼みをかけつるにたれやのものがまいり六原にて角と申
つらん うらめしさよとかきくときすたれのまより見出せは 年比召使しあこや
と申女さき馬に乗て来りたり あふ扱ははや此をんなかちうしんによりてけり
とんよくまうねんはなさけをもすてはてゝはちをもさらにかへり見すあこやかし
るへをする上は何と思ふとかなふまし いかゝはせんと申つゝなくより外の事は
なし 母のせんしすたれ巻上たち出梶原に見えければ先のかさしととらんとすせ
んしなみたをおさへ司士御前はきのふまで此寺に有つるかみやこの人目をつゝみ
かね大和の方を心かけ小夜更かたに出つるか人をつれさる道なれば宇治方にやま
よふらん追手を掛させ給へやと一たん偽たりければ梶原聞てけにもさやうに候覧
先さかし申てけになくは追手を掛申へし東はあくる津輕のはて西はろかいのとゝ
かんする程天下の其内をさかさぬ所有ましる誰か有参りてさかし申せ兵ともと下

知すれば 司士此由きくよりもなふそれまでもさふらはすみつからは是にさふらふそやしはらく暇たひ給へ此程なしみ申ひくにたちにいとま申やかて罷出へし梶原殿と有しかは 景時聞て腹を立更は先より此むねを角とは仰なくして其間は門前に待社申さふらはめこなたへしされ兵とて 門より外に引出すあしろのこしのふりたるに力者斗をあひくして門より内に入に覺あら痛しや司士御前此程なしみ申ひくにたちにいとまをこいなく／＼出んとし給へは 母のせんし是を見てしはらくなふ司士御前 いとゝたに女はごしやうさんしやうゑらまれつみのふかいと聞えさふらふよしつねの草のたねやとして露もきえやらぬたらちねの其中迄もさかせといふ事あらはめいとおもむく人そしかたきの手に渡らぬ間にかみそり衣ぬきかへかいたもつてめいとの道をおしへられて 出給へけに／＼思ひ忘れてさむらふとてひしりをしやうしたてまつり髪をろしと有しかはおとかめいかゝ有へきと人を出して梶原に出家のいとまをこひければ景時聞て是は関東よりの御使也わたくしにてはかなひ候ましくしをつけなから御下向あれよきやうに申なし御出家の御暇をはまいらせんと申すけに／＼是も道理とて髪をはいまたつけなか

ら 髪そり斗ひたいにあてかいみやうのもんとなへて五戒を請させ給ひけり
抑五戒と申はせつたういんまうこおんしゆ其みなもとを尋ぬるにりやうへんたし
やうのかゝのなれをくんでかんしんの法をつたへたり 天平勝宝六年に奈良の都
にかいたんをたて聖武皇帝はしめて受戒し給へり又天台の戒たんは弘仁五年にき
んさすの立させ給ふ上下万民をしなへて誠の道に入人の誰かは戒を請さらん抑第
一にせつしやう戒と申はものゝ命をころさぬ也其いはれをあんするに命はおもき
たから也昔けんじやうさんさうのしやうけうをわたさむとて流沙を渡りそうれい
のみねをこえさせ給ふ時ろくそくわう来りてしやうけうをうはい取ル見る人は是を
とふらいければさんそうのたまはくをろか也縦しやうけうはとらるゝとも命と云
おもき宝をとられねは何をさのみになけかんとうれいたいろもまします此世一
世の身ならす生々世々の命はおもきたからなるへしこのことわりを知らずしてあ
るひはとんにたえすしたしきをうしなひうときをほろほする くちのいたせる所
也今は人をころすとも因果は身につもるへし一世にものをころして七しやうまで
ころさるゝ くわきうの角の上にして何事をかあらそはむ石火の光水のあわたゝ

まほろしの夢のよに一たんのとんにふけつてせつしやうをするそはかなき 第二
にちうたう戒と申は他の宝をおかさぬ也此戒をやふる人はまとしき身と生るゝ也
今もひんくに有人はさきの世にものをぬすみしと思ふへしとうはうさくか三度ま
てせんのもゝをぬすみせんきうにこめられしもさこそはくやしかりつらめとを山
とりの花の色霞にこめて見えねは匂ひをぬすむ春の風おなし其名はたちなから科
にはあらしと思ふおさへてあやめらるゝ事三更のふかき夜に啼郭公音をぬすみ
めいと鳥と成にけり荒浅ましやかりにもちうたうをおかす事なかれ 第三に邪
姪戒と申すは我かいもならぬ女にことはをもかけすわかせなならぬおつとのこと
はをもかゝらぬ也しつとのつみはたしやうまできちくしやうに生るゝ也むらかみ
のあんしのねうるんはせいりやうてんのくわうくうにねたまれさせ給ひしゆしや
くるんの鬼となるおそれでもあまり有しやるんかいをたもつへし第四にまうこか
いと申は空言をいましめり此いはれをあんするに偽りおほきことはには其科多き
物也されは北野の天神のかむせうしやうにておはせし時 しへいのおとゝにざん
せられ心つくしへなかさるゑの木寺にてうせ給ふ 其科におとゝはならくにしつ

み給へはかんせうしやうはまさしくも今の北野の神となりまうしやうくんかいた
つらに鳥のそらねにせきをあけて仇にうたれ給ひけりなをいましめのふかき事は
まうこかいてとゝめたり 抑第五におんしゆ戒と申は酒にゑひてひれふしうりか
う事をいましめりきくわとうによといつし人は五百しやうのあひたくろのやみに
まよひしもふくしゆはかいなるかゆへあるひはしゆふうせんのいましめとかうし
又は三十六の科有ときゝへり(ママ)いましめふかき酒を何とて天台山にはゆるすそと尋
ぬるに昔てんたい山におんしゆをことにいましめ酒をきらひ給ひしに九重のせう
しやう御登山有し時けうおうのあまりに始て酒をゆるす事寒をふせかんだめ也た
いれいのゆうかんになを此酒をゆるせりましてくわていのゆうれいに誰かは酒を
のまさらんその前にゑいをすゝめ林水に盃をうかへしうのちやうやを見渡せば
山ももみちにゑふとかや酒をあひする人をはふくしゆと是を名付のむ事をゆるし
うりかふ事をいましめたりそれはいはれぬところ仏をはしめたてまつてあなん(ママ)か
せうしゆほたいいつれか酒をまいりよろほひありき給ひし酔ては心みたれつゝを
のつからしたをたちまちせつかいすなをいましめのふかきはおんしゆ戒にてとゝ

めたりかゝる五戒をまたうして一つもやふる事なくはてんりんわうと生るへしむかしゑしんの僧都たうきんのきやうかをかならす拝み給ふそうつのあねあんやうのあまふしんをなして問給ふ何とてそうつは王をおかませ給ふそ僧都こたへての給ふさん候王のたつときにて拝み申さすせんしやうにて戒をよくたもちいまこくわうと生れ給ふしゆくせんのちからのたつときに拝むとそ仰ける　いかにも我等さきの世にかいきやうなき故により心もくちにさとりなしいまこの申すかikiやうによりしんけうの衣のうへにかいほつをつゝみすてされよたうらいにてはかならすしゆかいのしゆるん浅からすむしやうとくたつ成給ひかへつて我をみちひくへし　称覚に忘れ給ふなと懇にときをしへ申す其日すてにいりあひのかねつく／＼とちやうもんす梶原は待かねて遅しといひてせめければ　聖なみたをなかしゑかうのかねうちならしとうみやうをけしあんしつに入せ給へはしつかはものゝふの手に渡るともしひくらうしてすかうくしかなんた夜ふけぬれはしめむそかのこゑとはぐしか別れをかなしひてつくり給ひししにてありければ異国のものかたり是は司士か身のなけきかんと和朝はかはるとも思ひの色はひとつ也かみは玉楼

きんでんしもは司士かふせやまてしつかをおしまぬ人をなきみめといひのうといひ心の情の道といひたくひもやわか有へきと人くなけきしうたんは四方にもあまる斗也 かゝるあはれをもよほす処にくき事こそ候ひけれあこやと申女梶原にむかつていふやう忘れさせ給はぬさきに御約束のほうろくをいそきたへと申す梶原聞て腹をたて何と申そあの女是程司士御前関東下向とて上下涙をもよほす処に申さんやなんちはきのふかけふにいたる迄其内に有しものそかし別れをはかなしまてほうろくのこいやうこそ心得られね余りにものを知らぬ女なれば因果れきせんの道理を語てきかせんそれにてよくちやうもんせよよひには楼月をもてあそふといへともあかつきは離別の雲にかくれぬ心はこくうしやうしうにしてかたち斗はかりの宿みゝはとせいのみゝ目はしやうはりのかゝみ口はわざはひのかど舌はわさはひの根舌三寸のさえつりにて五尺の身をはたす誰かあるあの女に引手物とらせよ承ると申て さうくるまに取て打のせて渡す所はどこくそかみは一条柳原しもはから九重こうちくを渡し見るものことににくませ後には此女かつら河のふかき所を尋ねてふしつけにしたりけりみやこの上下是を見てもものいひした

る女房かしよちをはたまはらてよみの国の大国をたまはつたりやと申見る人聞ものをしなへてにくまぬものはなかりけり角て梶原は司士御前をこしにのせしやうとうしを出る 母のぜんじもなくくちにてあくかれ出る司士此由見るよりも母をかちにてあゆませ申我身かこしにのりたれはとてやすき心の有へきかとしよりたる母上をのせてかけとてこほれ出る けにくちも道理とて馬をたてゝ母をのせ みやこに名残うき思ひものうき事にあわたくちわれをはとめよ関山しなのすさましさにすきふる雪の下道をあとよりも誰か大津浦きえはや爰に粟津か原思ひはなをもせたの橋野路に日暮て篠原やうきふししけきかりの宿の夜ことに物や思ふらん このほとは心のやみにかきくもりかゝみのも見もわかす名はさめかいときくからにふかき心はいつみかないとゝなみたのおほかるに兩山中やとをるらんあらしこからしふわの関月のやとるか袖ぬれてあれたるやとの板間よりしほりかねたるたもとかな夜はほのくちとあか坂やうちこそはたれくんぜ河うゑしきなへのいつの間に黒田とは成てはらむらん夏はあつたとなるみかた三河にかけし八橋のすゑをいつくととをたうみ恋をするかの富士の根の煙りは空によこをれてく

ゆる思ひは我はかり伊豆の三島や浦嶋かあけてくやしき箱根やまさかみの国に入ぬれはなをうき事をきく河の宿にもはやく着にけり 梶原道よりもはや馬をたて司士御前をはきく河の宿迄めしくして候道の草はの露霜となしもやせんと申す頼朝聞召れて鎌倉までめしくせよ尋ぬへき子細有承て司士を大御所さしてかき入る折節有合大名連所せきなくなみるたり 司士こしよりをりかゝみをも見わかすしはるかにさしきのあひたるをわかためそと思ひ人々の方をうしろになしつゝめとこほるゝなみたの色みたれかみをつたひてつらぬく玉のことく也やゝ有てより朝御対面の其ためにあをかり衣にたてゑほしめし和田ちゝぶ左右にして御座になをらせ給ひいそのぜんしかむすめ司士とは女房か事か四国九国のたゝかい合戦は珍しからぬ物かたり義経一人合戦世を治めたるこうにあらず頼朝かいせいによつて諸国はをのれとしつまりぬ世か我世にもあらぬには兵法のしゆつも叶すとをくいてうを尋ぬるにけいかしんふやうはんよきかくひをかつてしくわうていをねらひあはうでん迄のほるといへと運つきぬれはうたれぬさしもなたかき弓取もきんの音にとらかさるいわんや義経はけいかしんふやうはんよきはとはよもあらしまし